

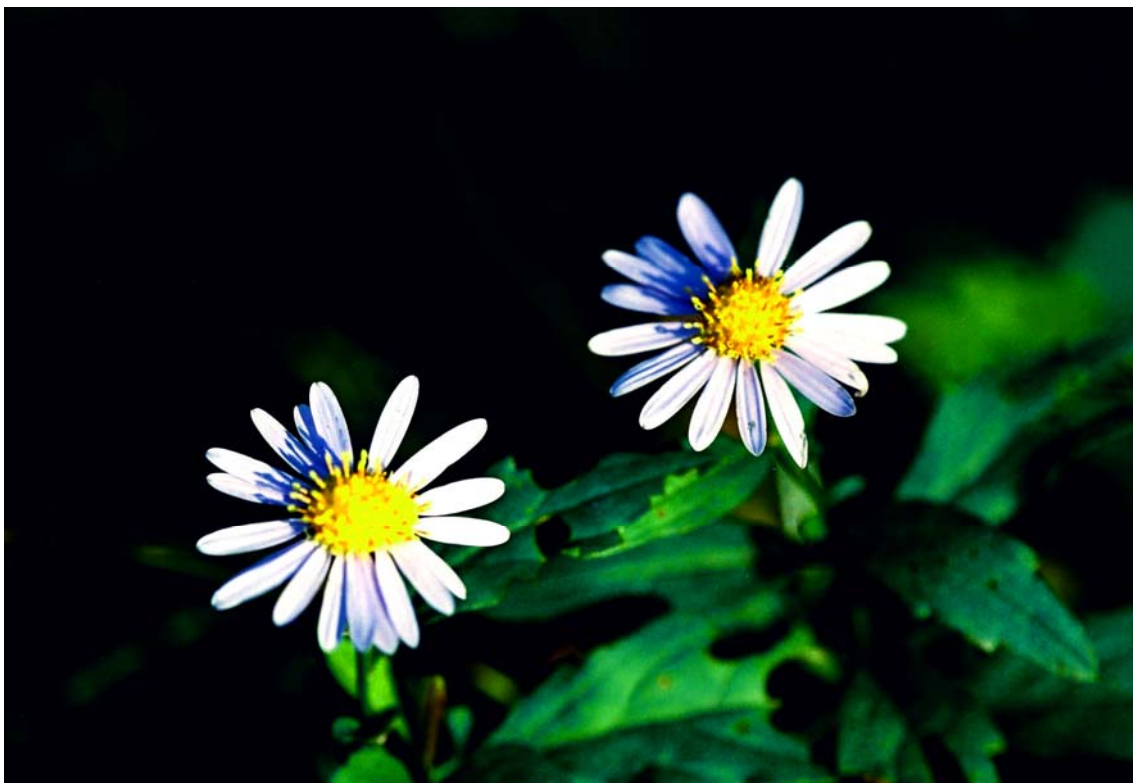
7) ノギク=野菊

ノギクは山野に自生するキク科植物キク属の総称である。したがってノジギク、ノコンギク、ヨメナ、カントウヨメナ、ユウガギクなど、近縁の様々な種が含まれる。これにアレチノギク(学名は『*Conyza bonariensis*』)を含めて野菊と言うことも少なくない。しかしアレチノギクは同じキク科であるがイズハハコ属で、どちらかと言うとヒメジョオン(学名は『*Erigeron annuus*』) や、ハルジオン(学名は『*Erigeron philadelphicus*』)などに近く、南アメリカ原産の帰化植物である。明治の中頃に渡来して以来、路傍や武蔵野の台地などにも急速に広まったが、最近では産地周辺で宅地開発が進み、むしろ減る傾向にある。一方ヒメジョオンは漢字では『姫女苑』と記し、ハルジオンは『春紫苑』と記す。ところがヒメジョオンを『姫紫苑』、ハルジオンを『春女苑』と間違われることも多く、紛らわしい植物ではある。ともにムカシヨモギ属で、これも北アメリカ原産の帰化植物である。前者は明治時代の初め頃に、また後者は大正時代の中頃に渡来した。この3種の帰化植物は繁殖力が強く、荒地でもよく生育するため、今では雑草としてどこでも嫌われ者になっている。

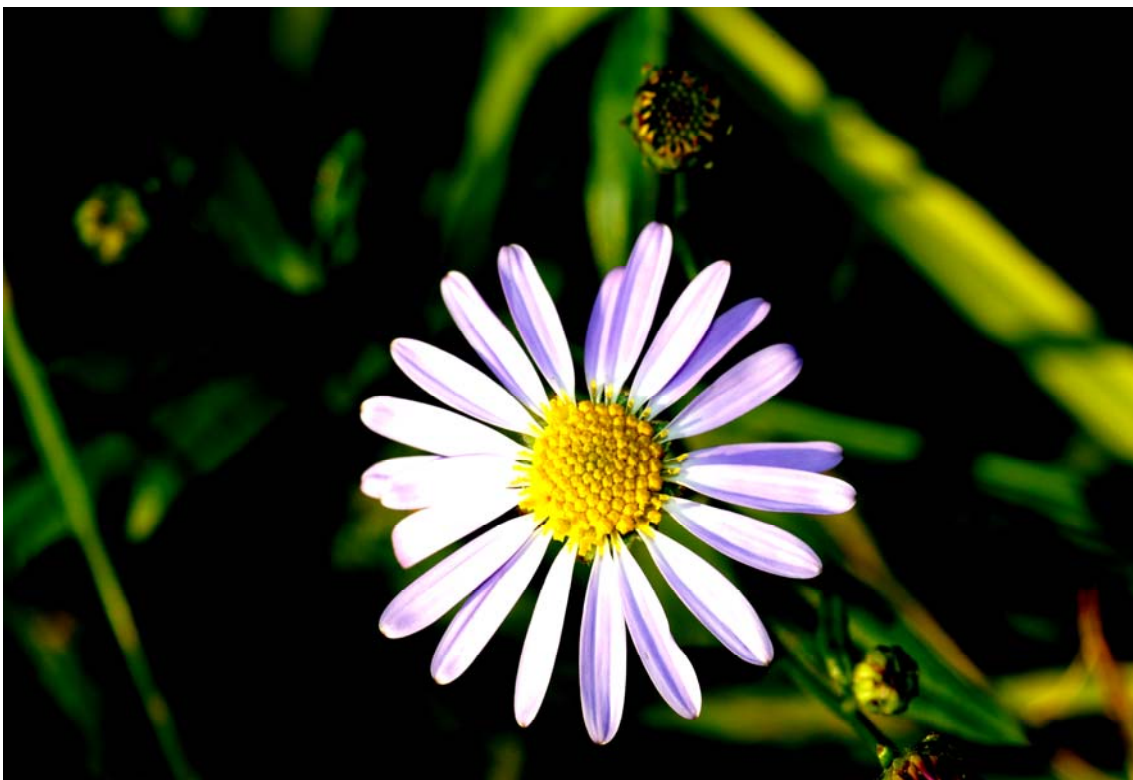
このように野菊は極めてあいまいな植物群で、明快に解説することはできない。そこで一つ一つ紐解いてみると、ノジギクは近畿地方以西の本州、四国、九州の海岸近くの山野に自生し、舌状花は白色で管状花は黄色である。現在栽培されているキクの前種の一つと考えられ、学名は『*Chrysanthemum japonense*』で、属名はキクを意味する古代ギリシャ名に由来する(05-01-09-1 キクの項参照)。一方ノコンギクは本州から九州の山野に生える多年草で、学名は『*Aster ageratoides*』である。属名は「星」を意味しており、種小辞はカッコウアザミ属に似たと言う意味で、和名の由来は舌状花が濃い青紫色のコンギクに対して、野山に自生するためにこの呼称となったものである。

ヨメナは本州の中部以西、四国、九州の田や畦などの湿り気の多いところに生える多年草で、漢字では『嫁菜』と記す。学名は『*Kalimeris yomena*』で、属名はこれも「星」を意味し、種小辞は和名そのものである。和名の由来は春、芽が伸びた頃に摘み取って、天ぷらや和え物、味噌汁の具などにして食べるところから、嫁が作る料理と重ね合わせたことによるものである。全草を乾燥させたものを民間では煎じて利尿や解熱などに用いた。春の代表的な摘み草で『万葉集』にも多くの歌が残されている。また関東以北にはカントウヨメナがあり、学名は『*Kalimeris pseudoyomena*』である。ユウガギクはマーガレットをやや小さくしたような花で、ユズのような香がするところから、『柚香菊』になったといわれており、学名は『*Kalimeris pinnatifida*』である。

野菊と言われているものはこのように極めて多様である。伊藤左千夫の『野菊の墓』は主人公が年上の女、民子と恋仲になるが、民子は彼女の意に反して嫁に行かされ、病を患い早く亡くなる物語で、川端康成の『伊豆の踊り子』とともに、青春文学の双璧であった。『野菊のごとき君なりき』は笠智衆と原節子が主演する映画のタイトルである。



ノコンギクはノギクといわれているものの代表格でヨメナ(嫁菜)にもよく似ている。花色はやや淡い紺色が普通だが、濃いもの淡いもの、白花もある(さいたま市桜区秋が瀬公園)。



さいたま市桜区秋ヶ瀬公園の湿地帯には青紫色のノコンギクが多い。



さいたま市桜区秋ヶ瀬公園内では白花のノコンギクもごく普通に見られる。どれもノギクとして子供の頃から親しんできた。



カントウヨメナ(東京都小石川植物園)



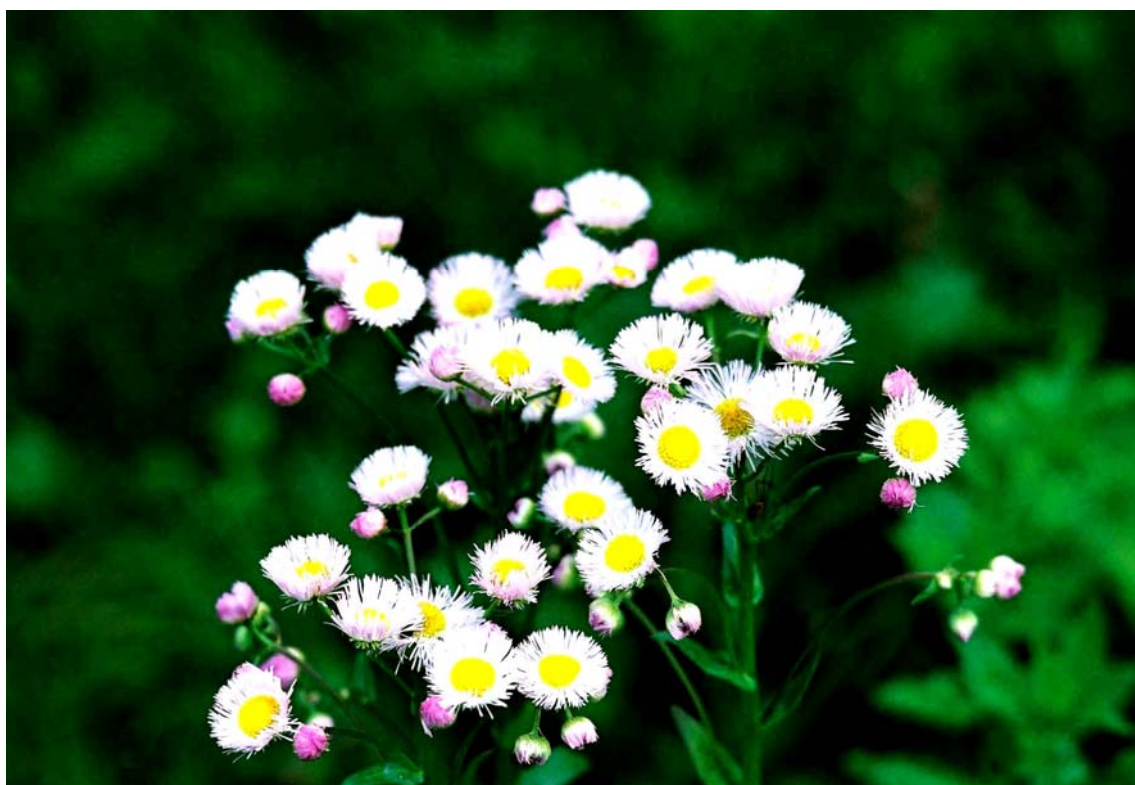
ユウガギクは関西以北の本州に多いノギクで、道端や田畑の縁などの陽当りのよいところに生える。花卉数は14~18枚で、花の色は白から淡い青紫色まで変化が多い(埼玉県日高市)。



長野県の路傍でよく見かけるノギク(長野県軽井沢町)。



アシズリノギクの花、野菊といわれているものは地方によって異なる。それぞれがふるさとの路傍に咲く野菊を思い起こせばそれでよいのだろう(東京都調布市神代植物公園)。



ハルジオン(千葉県東金市)

[目次に戻る](#)